

# 志賀海神社の八乙女について

石橋利恵

北九州大学文学部人間関係学科

## 要 旨

福岡市の一角に志賀島はある。この志賀島の志賀海神社に仕える巫女は「八乙女」と呼ばれ、昔から8人の老女たちがその任を果たしてきた。八乙女は八軒の家から代々世襲制で受け継がれてきたが、近年では現在のなり手にさえ不足している状態である。なぜ、戦後から変わることなく、伝統を守り受け継いできたはずの志賀島で、このような現象が起きているのだろうか。

本稿では、その「八乙女不足」に関するさまざまな要因について調べ、さらに氏子たちから取ったアンケートから、神社と氏子の関係を中心に検証していきたい。

志賀海神社では、古くからの祭りが今でもほぼ毎月行われている。しかも観光客集めのためではなく、あくまでも氏子主体である。志賀海神社の行事はいろいろな場面で氏子の奉仕活動に支えられており神社と氏子のつながりは深い。

「八乙女不足」の問題について、神社関係者は「時代の流れ」「氏子の信仰心の薄れ」を原因に挙げる。しかし、氏子から取ったアンケートを見てみると、それだけではないようだ。たとえば、神社そのものや祭りの意味について知らない人が増え、意味が分からないから興味を持ってない人が多かった。また、神社の内部のことが、関係者のなかだけで話がすすみ、他の氏子には全く情報が入ってこない、という話も聞いた。神社側は、今のところ具体的な方策は行っていない。しかし、氏子と同じくこのような啓蒙活動の必要を感じてはいる。

八乙女や祭り、古くからのしきたりなど、志賀島にはまだまだたくさんの伝統が残されている。それら志賀島の貴重な文化を残していくために、神社と氏子の一層の情報交換が課題となるだろう。

## 目次

### はじめに

- 第一章 志賀島について
- 第二章 志賀海神社について
- 第三章 志賀海神社の八乙女について
  - 第一節 八乙女とは
  - 第二節 聖なる数字“八”
  - 第三節 限りない清浄への願い
- 第四章 阿曇族について
  - 第一節 「阿曇」の名を持つ一族
  - 第二節 阿曇族とは
  - 第三節 阿曇族の繁栄と没落

- 第五章 八乙女の宮づとめ
  - 第一節 位上げの儀式
  - 第二節 八乙女の舞い
  - 第三節 お宮上り
- 第六章 御神幸祭について
- 第七章 八乙女の面々
- 第八章 氏子の意見
  - 第一節 アンケート結果
  - 第二節 クロス集計
  - 第三節 「その他の意見」からの考察
- 第九章 考察
- 謝辞

### はじめに

志賀島は、地図（資料1）にもあるように、島といっても百万都市福岡市の一角である。

しかし、「土地の人は都会の風俗にまみれず、

古い民俗と共同社会を保ちながら、自然のサイクルのままに暮らしを立てている。・・・海神信仰が島の共同社会を驚くほど強く結んでいる。戦後の祭り荒廃時代にもよく耐えて乗り切った。

祭りは共同社会の絆である。」と森山邦人の『志賀島の四季』には記されている（森山 1981）。

その祭りの中心となる志賀海神社に仕える巫女は「八乙女」と呼ばれ、“昔”から8人の老女たちが無報酬でその任を果たしてきた。八乙女は八軒の家から代々世襲制で受け継がれてきたが、近年では後継者どころか今現在のなり手にさえ不足している。

なぜ、戦後から変わることなく、ふるくからの伝統を守り受け継いできたはずの志賀島で、このような現象が起きているのだろうか。

本稿では、その「八乙女不足」に関するさまざまな要因について調べ、さらには氏子たちから取ったアンケートから、神社と氏子の関係がどうなっているのかを検証していきたい。

## 第一章 志賀島について

志賀島は昭和46年（1971）に福岡市に編入合併した。以前は福岡県糟屋郡志賀町。

昭和6年（1931）に志賀島橋ができるまでは、志賀島は離れ島であった。本土と志賀島の間は、潮が満ちると途切れ、潮が引けばつながって歩いて渡れた。その接続地点を「道切れ（潮切れ）」と言っていた。

志賀島は、大昔は「近島」と言った。その起りは神功皇后が新羅に渡るときに、この島の近くに船を止めた。陪従に大浜、小浜という者がいたが皇后が小浜に「火を求めてくるように・・・」と命じたところ、小浜はすぐに火を持ってきた。大浜が「近くに家があったのか？」と聞いたところ、小浜は志賀島から持ってきたと言い、「ここからは地続きの近いところにある島だ」と説明したので、「近島」と名付けられ

た。それが「資珂島」と訛り、のちに「志賀島」になったのだといわれている。

平成10年現在の人口は807世帯2515人。平成2年からの人口動態率はマイナス216人、高齢者率（平成9年）24パーセントである（資料4）（『福岡市の人口 住民基本台帳』）。は神功皇后が新羅に渡るときに、この島の近くに船を止めた。陪従に大浜、小浜という者がいたが皇后が小浜に「火を求めてくるように・・・」と命じたところ、小浜はすぐに火を持ってきた。大浜が「近くに家があったのか？」と聞いたところ、小浜は志賀島から持ってきたと言い、「ここからは地続きの近いところにある島だ」と説明したので、「近島」と名付けられた。それが「資珂島」と訛り、のちに「志賀島」になったのだといわれている。

平成10年現在の人口は807世帯2515人。平成2年からの人口動態率はマイナス216人、高齢者率（平成9年）24パーセントである（資料4）（『福岡市の人口 住民基本台帳』）。

## 第二章 志賀海神社について

八乙女について述べる前に、八乙女がつとめる志賀海神社について説明する。

志賀海神社は志賀島の勝山のふもとにある。今日では「しかうみ神社」というのが正式の名称である。この神社が本来どのように呼ばれていたかについては、「しかのわた」（『大日本地名辞書』）、「しかのあま」（『神祇志科』）、「しかのうみ」（『神名帳考証』）、「しかのわたつみ」（『古事記伝』）など、各説がある。

志賀海神社は、『延喜式』神名帳に載る名神大社であり、祭神は

底津綿津見神

仲津綿津見神

表津綿津見神

の三神である。

系譜（資料5）にあるように、綿津見神の子の穂高見命が阿曇族の祖とされている。阿曇族とは、第四章で詳しく述べるが志賀海神社に代々仕える一族である。

古事記（上巻）によると、伊邪那岐神が穢れを祓い清める段で、「其の禍を直さむとして、成りませる神の名は」として、

水底にそそぎたまふ時に、成りませる神の名は底津綿津見神

中にそそぎたまふ時に、成りませる神の名は仲津綿津見神

水の上にそそぎたまふ時に、成りませる神の名は表津綿津見神と、袂ぎ祓いの神として、「綿津見神」の出生が物語られている。

平城天皇の大同元年（806）に阿曇神に神封八戸が寄進され、清和天皇の貞観元年（859）に従五位上の神階が授けられた。南北朝の頃には衰微したが、大内持世が再興し、さらに豊臣秀吉が50石を寄進している。また小早川隆景、黒田長政なども崇敬した。明治5年村社に指定。大正15年官幣小社に列せられた。

境内には本殿の左側に今宮社がある。祭神は穂高見神と阿曇磯良神である。阿曇磯良については、『八幡大菩薩愚童訓』に、神功皇后の乗船の舵取りをつとめた人物とされている。ながく海中に住んでいたために牡蠣などが顔面に付着して、磯良の容貌は醜怪であったと述べられている。そして、八乙女が老女であるのは、磯良がその姿を若い女性に見られるのを嫌うためであるとも考えられている。

### 第三章 志賀海神社の八乙女について

#### 第一節 八乙女とは

一般に、神楽舞は若い娘が舞うことが多いが、志賀海神社では平均年齢70歳を超える老女たちが行く。このような例は全国でも珍しく、西日本ではここだけといわれる。この老女たちを「八乙女」という。

「八乙女」とは、

やおとめ【八少女・八社女・八女・八姫】

大嘗祭・新嘗祭・神今食祭などの、天皇が皇祖神および天神地祇に飯を供しみずからも食する神事に八男とともに神祇官の卜定によって奉仕した八人の采女。

神社に奉仕し、神楽などを奏する少女。八人と人数が限られていたわけではなく、数人の少女を総称したものか。

（『日本国語大辞典』）

志賀海神社の八乙女に関する最も古い資料として、鎌倉時代に描かれた「神功皇后の三韓征伐の縁起絵」があり、そこに八乙女の姿が見られる。こうした資料から八乙女は、鎌倉時代またはそれ以前に存在していたことは間違いない。

宮田登の『海と列島文化』にも、「『日本三代実録』貞観十八年（八七六）正月二十五日条によると、志賀白水郎男十人女十人が、香椎廟宮の毎年春秋の祭日に風俗楽を奏しており、宝龜十一年（七八〇）には、大宰大貳佐伯今毛人がその衣装を作っていたことが知られる。風俗楽というのは、曲譜をともなう国風の歌舞＝民俗楽であろう。古代、地方の民謡が宮廷にもちこまれて“風俗楽”として古典化するが、そのなかに“八乙女”がある。志賀海神社では、現在

も八乙女神楽が行われており、上の宝亀・貞観の風俗楽にさかのぼらせて考えることが許されるかもしれない。」とあり、上の記述と一致する(宮田 1990)。

ただ、絵を見た限りでは、八乙女は若い女性であった。

## 第二節 聖なる数字“八”

なぜ志賀海神社の八乙女は八人なのか。

志賀島は「八づくし」と言われるほど、「八」という数字が重要な意味を持つ。まず志賀島の枕詞が「八つの耳」である。神社の正月二日の祭りが「謡初め」でその歌詞の初めに「八つの耳きく志賀の浦」と出てくる。さらに歌詞をたどると、志賀の神は八尋のカメに乗って現れ、島のマツは八万年も青々と茂るといふ。1月15日には県指定の無形文化財「歩射祭」がある。その的は新ワラを束ねて作るが、ワラは八束を四組、計三十二束。締める縄が八を二で割る四本を一束に。的の直径八寸(鯨尺)八つの耳(飾り)がついている。祭りの際の射手が八人、その助手格の矢取の少年が八人。祭りの世話役が八人。矢篠を切る日が1月8日。矢の数は四十八本。射手の潔斎食の吸い物の身は豆腐一丁を八の三倍、二十四に分けた一切れとブリ。そのブリのエラで八本の剣を作ってお守りに。十四日、沖津宮のみそぎのあと供えるダイダイが八個。

先代宮司阿曇磯興氏は、「催しごとで数を合わせるときは八か、八の倍数にしておけば、しきたりを間違えることはない。」と森山邦人の『志賀島の四季』の中で語っている(森山 1981)。

それら“八”という数は、「末広がり」で縁起が

いい」ということもあるが、それと並んで、「中西八軒」とよばれる志賀の水先案内人からきているのではないかと思われる。「中西八軒」とは、「浦君八軒」の通称で、神功皇后が朝鮮に渡る時に船を出したのがその由来だといわれている。『筑前国風土記付録』に「大岳の北外海に、塩屋、尾掛り、四つの網代、名五間、神海、御浜とて、六つの瀬あり。皆神所という。明神の祭り毎に、志賀の漁夫八家の浦公は、この六つの瀬及び一ノ瀬、二ノ瀬にて贄の魚を取り、神祭に備ふと言う。八家の漁夫は名草の末にして浦公とよぶ。代々漁を業とし神に仕ふまつるとなん」と記されている(資料3:中西八軒の家)。

## 第三節 限りない清浄への願い

なぜ志賀海神社の八乙女は老女なのか。

古代の日本人は、身に付いたけがれが災いを生むと考えていた。玄界灘のような、危難の多い海で暮らすには、けがれを払うことに異常なほど神経をつかったもので、志賀の人たちに不浄を極端に忌む風習が発達したのは、その自然のきびしさを反映しているためといえるだろう。

他にも、祭神がけがれを払うときに生まれた神であるということや、「海の中道は、満潮時に道が杜切れぬこともあるさうで、これはなにが神慮のあることと島人はいましめ、又ここでは格別に不浄を忌み、月水ある婦人は今に別火し葬式も裏道で行って本通りは憚り、死人ある家は別に暇小屋をたてて他人と接するを避くるなど、物忌みのやかましい所である。」(谷口 1978)というように、その不思議な地形も志賀の人々が不浄を嫌う要因になっているようである。

不浄(忌)、赤不浄(生理)中はお宮に上がれ

ない。親が死んだなら、一年(昔は三年だった)は喪に服さなければならない。もちろんその間はお宮に上がれない。

八乙女など神社に奉仕する者は、不浄があけてもお宮に上がれない。被ってもらわなければならないのだが、お宮に出向くわけにはいかないので、社人に被りに来てもらう。そのときに塩、米、魚(いりこ) 初穂料(五千円くらい)をおさめる。

それに、志賀の神様は若い女性を嫌われるという。だから、志賀の漁船は古くから女性は乗せなかった。今では女性も船に乗り込んで漁をするようになったが、それでも男が一人でやれるような沖の仕事ならば、女性は乗せない。志賀島の漁船の女性禁忌について、「お香椎さま(香椎宮の神功皇后)が、お志賀さま(志賀の祭神)に、朝鮮に渡りたい(新羅征討神話)ので、舟に乗せていってくれと頼まっしやっした。

その時に無事帰ってきたら、嫁ごになると言わっしやっしたげな。ところが、帰ってきて、お香椎さまは約束を破って、お志賀さまを振らっしやっした。はらかいた(怒った)お志賀さまは、おなごは信用できん、もう好かんと言わっしやっした。それから女を乗せとる舟を見ると、はらかいてたたらっしやるげな・・・。」という土地の言い伝えを、志賀島の小林才一郎さんは『志賀島の四季』の中でこう語っている。また、出産の大役を担う女人は、危険を伴う船には乗せられないという説もある(森山 1981)。

その限りない清浄への願い、女性禁忌が八乙女を作り出したと考えられる。歳月がけがれを風化させて、月のものも枯れた老女こそ清澄そのものだ、という思想が志賀海神社の八乙女の中にみられるのである。

## 第四章 阿曇族について

### 第一節 「阿曇」の名を持つ一族

第二章で述べた阿曇磯良と同じ「阿曇」の名を、志賀海神社の歴代の奉仕者が名乗っている。

島の歴史学者梶嶋好之氏によると、志賀の住民はみんな「阿曇」だったが、ただ昔は身分の低いものは「名字帯刀」を許されなかったので、宮司という高い地位にあった者だけが「阿曇」を名乗れたのだという。

ではその「阿曇」とは一体何者なのだろうか？

岡田光夫の『海国日本の誕生』より、阿曇族について引用した。

### 第二節 阿曇族とは

阿曇族は南方系海人族であったといわれている。

海人とは、特に古典に見られるものは、一般に漁業に従事するか、若しくは、船を操って航海に従事した、海辺の民のことを総称したものをいう。

阿曇の名が古典に登場するのは、古事記(上巻)において、「伊邪那岐神が“筑紫の日向の橘の小戸のあはぎ原”で褌ぎ被えをされたとき、綿津見三神が出生された。此の三柱の綿津見神は、阿曇連等が、祖神と以ちいつく神なり」とあるのが最も古い。

「阿曇」というのは、「海祇」の約で、海についての特殊技能者(優秀者)という意味を持っている。

### 第三節 阿曇族の繁栄と没落

この筑前の阿曇氏が、国史上に名を出してくるのは、神功皇后、応神天皇頃に、三韓との交渉が頻繁になるころからである。

そのころ、阿曇氏が「海人の宰」に任命され、全国の海人集団の統率者として、朝廷の命令伝達者になった。

また日本書紀によると、阿曇氏は記紀の編纂にも預かり、三韓交渉にも当たるといのように、特に推古天皇以後、持統天皇までの同氏に関する功績は高く評価されている。その後奈良時代にあっても、阿曇氏の本系は朝廷に出仕し、若狭守、安芸守の如く、海上航通の要衝の国の重職に就くか、天皇の御食膳の長官たる奉膳の職に就く（海産物の管掌）というように、自己の「海人族」出自の職能をフルに利用活用することによって、朝廷に奉仕していたのである。

ところが延暦八年に、高橋氏（高橋朝臣活磨）と阿曇氏（安曇宿禰継成）が、神事の供膳の列の先後について、争論を起こした。その結果、桓武天皇の裁定によって、阿曇氏は争いに破れ、その継成は佐渡へ流罪に処せられるに至った。

阿曇宿禰継成が朝廷を追われたあと、阿曇氏の一党の朝廷にあるものは、没落の一途を辿るに至った。

そして、地方たる筑前国志賀島の志賀海神社に、神主として奉仕していた阿曇氏だけが、神主たるの故を以て、中央からの監視の眼から離れて家職を全うし得ただけであったという（岡田 1976）。

## 第五章 八乙女の宮づとめ

### 第一節 位上げの儀式

八乙女として神社に上がるには、「位上げの儀式」を通過しなければいけない。

それは弘の浜と勝馬のお宮（沖津宮、仲津宮）に参って行われる（資料2：地図）。この、島を一周するコースを、昔は歩いていったという。お年寄りにはさぞかしきついだろう。今は車で移動する。儀式は八乙女だけで行い、宮司や社人たちは参加しない。

儀式には、ミカン（橙）を一個とかまぼこ、そして御神酒を二合ほど用意する。まず、金印公園の近くにある叶ノ浜に参る。浜には平たい大石があり、そこで拝み、その後御神酒を海に少量流す。そしてミカンの皮をむき、実を取ったものを杯にしてみんなで御神酒をまわし飲む。御神酒と一緒にミカンの実とかまぼこもいただく。次は弘の浜に参る。そこでは拝むだけで他のことはしない。勝馬の沖津宮には、干潮の時以外は渡れないので、たいていは渡らずにその手前の浜で上記の儀式を行う。社人の位上げの儀式の場合には、襦ぎをかかねて海を渡って沖津宮に参るそうだが、八乙女の場合は海に入らない。襦ぎは宮に参る前に家でお風呂に入ったりシャワーなど浴びたりすることで代用する。最後の仲津宮にはきちんとしたお堂があるのでそこで行う。ただ、沖津宮は浜ではないので海に御神酒を流すことはしない。

最後に志賀海神社に参って報告をし、宮司にお祓いをしてもらう。

それから、お宮から出た助成金でみんなで食事をする。この儀式を終えて初めて、新しい八乙女として本殿に上がることができるのだ。

引退するときは、特に儀式などなく、みんなでお別れ会のような食事会をするそうだ。

## 第二節 八乙女の舞い

八乙女の舞いというのはどのようなものなのか。それは想像よりずっと静かでさみしいものだった。6月5日に行われた御田植祭を例に挙げる。

宮司や社人たちが儀式を行っている間、八乙女はずっとひれ伏して、顔をあげることはない。健康な若い人でもつらそうだ。それを、足腰が弱った年輩の女性たちがしてしているのだ。これを見たら、八乙女になることにためらいを覚える人もいだろう。

儀式が終わり、宮司、社人は末社でも儀式を行うために本殿を出る。八乙女は本殿に残り、いそいそと舞の準備を始める。本殿のすみに置いてあった道具箱、太鼓を引っ張りだし、両端にひいてあったむしろを中央に持ってくる。片手に扇を持っているので、もう片方の手で作業を行わなければならない。そして、資料6のように自分の位置につき、道具を持って準備は完了である。

この日の八乙女は折居さん、上野さん、中島さんの3人。太鼓1人(折居さん) 鐘1人(上野さん) 舞が1人(中島さん)と最小限の人数だった。

### 御田植祭の神楽歌詞

“五月雨はいかにふるともよもぬれし三笠の山のさしてしければ”

を舞の上野さんが歌う。鐘のリズムは「カーン、カーン、カンカン」をくりかえす。太鼓は「ターン、ターン、(休み)」である。

(資料7)

歌っているあいだ、上野さんは舞を舞う。舞といっても鈴を振りながら回るだけである。上の歌を2回くりかえして舞は終了である。周囲

に人がいないせいか、なごやかな雰囲気、歌の間違いを指摘し合ったりと全て自分たちのペースで行っていた。

## 第三節 お宮上り

八乙女の宮づとめは「お宮上り」といって、神社に上がって奉納舞を舞うのが仕事だ。回数は、以下にあるように年に10回ほどである。

1月7日 七日祭

1月15日に行われる歩射祭で使う射場の被いをする。八乙女の初出仕の祭りである。

1月15日 歩射祭

破魔弓の神事。県の無形文化財に指定されている。起こりは土蜘蛛退治の伝説による。大的は蜘蛛の形をしている。

3月31日 山誉種蒔漁獵祭

磯良が神功皇后に食膳に奉仕したという故事を伝承する。社人が志賀三山に向かって「ああら、よい山、茂った山」と誉めあげる。秋の山誉漁獵祭とともに、山林の繁茂、豊作、大漁を祈願する祭事である。

4月3日 田起祭

6月5日 御田植祭

両祭りとも節句の行事である。社人たちが拝殿で田を耕したり、稲を植えるしぐさをする。

7月15日 祇園神楽祭

8月6、7日 七夕祭

漁師のお祭り。福岡市西区の姪の浜や玄界島から船が「ことなき柴」と呼ばれるお守りを取りに来る。「ことなき柴」とは、神功皇后が船の舳先にお守りにつけたことから、厄よけとして使われるようになった。氏子たちに笹が配られるので、人気が高いお祭りである。

10月1日 男山祭

10月9、10日 国土祭

次の章で詳しく述べるのでここは省略する。

11月15日 山誉漁獵祭

12月15日 お鈴納め

八乙女の一年間の奉仕の締めくくりである。

## 第六章 国土祭について

ここで、志賀海神社で行われている祭りの一例として、10月9日に行われた秋の大祭「国土祭」を挙げる。今年は残念ながら神様の旅のない年だったが、それでも街あげての盛大な祭りであることには変わりなかった。

この秋祭りの幕開けは、10月1日の男山祭だ。神様が、ことしは秋の旅行(「おみゆき」「おくだり」といわれる)をしたいのか、やめたいのか、それを占う祭りである。

神社関係者が参列するなか、宮司が長さ30cm位の椎の棒につるした幣をたらす。その先端は数十本に分かれ、釣り針のように上へそりかえっている。そこへみくじを引っかけるのである。みくじは二枚、一方には「御神幸あらせらる」別のほうには「御神幸あらせられず」と書いてあるが、このことばは語尾の発音上、あやまりが多いので、現在では分かりやすく、「御神幸あり」「御神幸なし」と書かれるようになった。

「御神幸あり」ということになると、神職及び社人で頼宮(通称「おかりや」神様の旅行先。参道の途中にある)にひもろぎを立てに行く。そのときに「男山」と称する次の文句の歌を歌いながら赴くので、このおみくじ上げの祭りを、「男山祭」と称するのである。

“やあー男山、峰のと一、やおろず、昔も今

も、なすよしもー(がな=無声)”

ひと歌終わるごとに、長さ50cmほどの笏形の拍子木をパチリと打つ。

というふうには、以前は御神幸は「おみくじ」によって決せられていた。しかし、何年も御神幸がない年が続いたと思えば今度は毎年あったりと不安定で、それだけに準備が大変だったり、奏楽や舞を忘れてしまう(祭りの準備と芸能の練習は、男山祭以前にやってはならない掟がある)など、不都合があるということで、現在では1年おきに御神幸が行われるようになっていく。

そして10月9日午後7時より御神幸祭が始まった。昔(旧暦9月8、9日)は神社西の衣笠山に月が入ると同時に始めた。しかし、子ども参加が増え、夜中はきついだらうとの配慮から時間を早めた。日にちも、土曜日や祝日前に持ってくるようになった。

7時から宮司、禰宜、社人、八乙女が本殿で、儀式を行う。位上げをしていない臨時の八乙女は本殿にあがれないということで、門の外で待機していた。その間、だいたい7時半頃から獅子や御幣持ち役の男の子たち、町役員(町の名が入った提灯を持ってくる)などが境内周辺に集合する。そして8時すぎに順序よく並んで、「お下り序列」をつくり、おかりやに向けて出発する。

行列が通る道沿いに氏子たちが集まって来ていた。通りの家の者は家の前にむしろをひいて、その上に正座して拝んでいる。各家には提灯が下げてあり、とても幻想的で美しい。通り沿いの家はほぼ全部の家が提灯を下げていたが、通りからそれると、提灯はまばらだった。通り沿いでない人たちはお祭りに対する意識が薄い、というのがこういったところに表れているのか

もしれない。

おかりや前では、子どもたちの奏楽隊がササラ、横笛、太鼓を奏していた。昔は成人が当番制で行っていたが、なり手が減り、今では子どもたちに任せるようになった。そのため志賀の小学校では、音楽の授業で横笛を習う。本来なら御神幸がない年は、奏楽はなくてもよいのだが、小学生の奏楽隊では6年生が華になるため、奏楽は毎年行われている。

奏楽隊は「一の戸」「二の戸」「三の戸」と三つの集団に分かれていて、奏楽の曲（一番から六番までである）もそれぞれ違っている。一の戸と二の戸はササラを持った男の子が「一の戸いちばん」と元気に指揮をとっていたが、三の戸では、おじさんが仕切っていた。しかも三の戸だけがおそろいのハッピーを着ていた。

志賀島の氏子は三つに分けられている。漁師が多い志賀島浜部落が「一の戸」、半農半漁、役人が多い志賀島岡部落、弘部落が「二の戸」、そして勝馬部落が「三の戸」である。

おかりや周辺にも人がたくさん集まってきていた。しかし、行列が到着して落ちつくと、人々は各家へ帰りだす。家に獅子が来るからだ。獅子も昔は青年団の仕事だったが、現在は中学生の役目になっている。獅子は各町内に二匹いて、八頭計十六人である。獅子は自分の町内の家を一軒一軒まわる。「きゃーん」と鳴いて家に入ってくる獅子に、人はお金やかまぼこなどをふるまう。これも昔は振る舞い酒だった。

八頭の獅子の口をとって綱を引くのは、将来社人になることを登録している一歳の幼児たち。幼児は頭に獅子の「じょう口」の綱と同じ紅白のねじり鉢巻きをする。彼らは母親に抱かれているので、閉経前の婦人を不浄とする志賀神も、

この日ばかりは女性を連れての旅になる。

おかりやでの儀式の間、奏楽隊の子どもたちは公民館でジュースなどをふるまわれ、再び8時45分ごろ集合した。儀式が終わり、行列が志賀海神社へ戻る際にも彼らは楽を奏するからだ。そして行列が境内内に戻ると、そこで一時解散する。祭りはここまでである。関係者でこの後直会がある。

次の日は午後から流鏝馬があった。馬と射手は借り物だった。昨夜行列が通った通りを今日は馬が走る。通りは狭く、車がすれ違うのに苦勞するほどの幅しかない。そこを巨大な馬が駆けるのだ。的は理容店の屋根と自動販売機の上、宮司の家の塀の三箇所に取り付けられた。

気付いたことは、これだけ大がかりで見がいのある催しなのに、見ている人々は氏子たちだけなのである。町や神社の宣伝、活性化に大いに使えそうなのに、ひっそりと行われている。周辺の街に住んでいる人もほとんど知らない。ここでは祭りは、観光や見物客をあつめるためのもではなく、あくまでも氏子たちのものなのだと強く感じた。

## 第七章 八乙女の面々

現在の八乙女は、内山サエコさん、折居トキコさん、上野サダさん、中野スエコさんの4人で、舞2人、太鼓1人、鉦打ち1人の分担になっている。本来8人いるときの分担は、舞2人、太鼓1人、そして鉦打ちが5人である。

それでは八乙女の面々にふれていきたい。

内山サヨコさん（不明）

姑が八乙女をしていたので、その後を継いだという。一番長くしているらしいが、体調が悪

くて入退院を繰り返しており、お宮に上がることもままならない。彼女は島外からお嫁に来た。

折居トキコさん（82）

彼女は前宮司のいところであるという縁から、八乙女のはなしが来た。祖先が糸島桜井神社の大宮司だったらしく、そのことに誇りを持っている。そのため非常に信心深い。周囲が「80もすぎとうのに、神様、神様、ってもう凝り固まってしまつたらうが・・・」（婿養子：折居力曾さん談）と心配するほどだ。

八乙女のはなしがきたときの気持ちを、「神様のためなら喜んで、とお受けしました。氏神様に守ってもらつとうけん、私らは生きていけるとよ。」と語ってくれた。親戚に不幸があつて、しばらくお宮に上がれなかったときも「もうお宮に上がれん間は腐つた。気持ち悪うてね。そいで久しぶりにお宮に上がったら、すっきりして気持ち良かったー。やっぱり神様があつてこそその自分やね・・・本当にありがたかね。」というくらい、彼女にとって神社という存在、八乙女という役目が生き甲斐のようになっていく。

八乙女のなり手不足について、「こういっちゃなんやけど、今の若い人たちには敬神の念と忍耐力がないよ。」と厳しい意見。八乙女が嫌がられるのは、長い間正座をしなければならないし、階段の昇り降りも大変で、足腰の弱つたお年寄りにはきつからだろうと自分の経験から分析している。神社は高台にあり、階段が長くて上り終えたときには息がきれているほどだ。階段は急な石段なので、下りるときなど傍目にも危なっかしい。しかも、手すりがつけられたのは5、6年前だという。

そして、お宮に上がるときは、着物を着ていなくてはならない。その着物も、季節ごとに

替える。春は袷羽織、夏は紵羽織、秋冬は単羽織といったふうに。だから、八乙女のはなしを持ちかけるのも、着物を持っている人に限られてしまう。しかし最近では着物を持っている人も少ないという。

上野サダさん（82）

折居さんと同級生で、幼なじみ。夫もお宮で奉仕する社人である。

この方もとても信心深い。八乙女のはなしがきたとき、「神様のために続くかぎりやってみようと思った。」という。

中島スエコさん（67）

折居さんと上野さんが、私が初めてお会いした八乙女だったので、「八乙女は老女」というイメージがあつたが、この方は比較的若かつた。それもそのはず、中島さんはまだ60代。折居さんたちとは親子くらいの差があるのだ。

初めてお会いしたのは御田植祭のときだった。紹介されたときに、中島さんは「本当はしたくなかつたんやけどね。」と周囲を気にするふうでもなく言つた。彼女の姑が八乙女だったので、その後を継いだということだった。

しかし、八乙女はならなければならないというものではない。実際、母や姑が八乙女をしていても、そのあとを継がないという人はたくさんいる。中島さんは「したくはない」と言いつつも、休むこともなくきちんと務めている。並大抵の覚悟ではここまでできないのではないのだろうか。

ここからは、正式な八乙女ではないが、国土祭のときに臨時で参加した方を紹介する。

中西ミツコさん（62）

姑が八乙女をしており、その姑が体調をくずしてから代理ということで、毎年国土祭のときに臨時で参加していた。そして姑が亡くなり、

その喪が明けたので、正式に八乙女になることになった。

中西さんは、「いわれもあって、昔からの文化が今でも生きとう志賀島に生まれてよかったと思っています。八乙女は好きやないけど、この文化を残していきたいから・・・(なろうと思った)」と語る。彼女は、折居さんたちのように格別信心深いわけでも、中島さんのように消極的なでもなさそうだ。

中西さんが語るには、八乙女だけでなく志賀の文化すべてについて言えることだが、若い人たちだけでなく、年寄りのあいだでも文化を残していこうという気持ちが薄れてしまっているという。

「昔は余所からきた嫁でも、姑が志賀の文化を家のしきたりとして、厳しく教えて、たたき込んで受け継いできたとですよ。でも、今は年寄りのほうが『若い人は言ってももうせんちゃん』とあきらめてしまつとると。『受け継いでいかな』という信念があればね若い人にも通じるやろうけど、もう年寄りのほうに信念がなくなってしまうとですよけんねえ・・・。」そして、そのことは神社側・・・宮司にも言える。八乙女が8人そろわない、という件に対しても、「もう6人でいいですから・・・」とあきらめてしまつて、これという対処もおこなおうとしない。八乙女だけでなく、志賀のたくさん文化を残していくためには、宮司など神社側が講演などをおこなつて、子どものころから志賀の人間としての心構えを育てていくべきだ、と中西さんは考えている。

小林チヅコさん(不明)

この方も、毎年国土祭のときに臨時で参加している。母が八乙女をしていた。正式に八乙女にならないのかという質問に、「まだうちは孫

が高校生でいろいろと忙しかけん。さっき宮司さんにも『なつてくれんですか』つて勧められたばつてん、まだいつときはせんやろうねえ・・・。」と答えてくれた。

折居キヨコさん(不明)

体調が悪くて、国土祭にでられない内山さんの代理で参加した。内山さんのお友達で彼女に代理を頼まれ、紹介されたという。八乙女は初めてなので、失敗しないかとかなり緊張していた。小林さんと同じく、正式な八乙女になろうと思うかと聞くと、「私は志賀の人間じゃなかとですよ。古賀(福岡県古賀市)から嫁に来ました。だけん、八乙女になるげな考えたことありません。」と語つてくれた。

## 第八章 氏子の意見

今度は氏子側の意見を聞くために、アンケートを取つた。

対象は志賀島に住む20歳以上の女性。40人。平日と土曜日に各家を訪問し、アンケートを配つて、後日回収した。(資料3:アンケートを取つた家)

### 第一節 アンケート結果

#### 【志賀海神社「八乙女」についての意識調査】

志賀海神社のお祭りにはどのくらい行きますか？

(有効回答39名)

- |           |     |     |
|-----------|-----|-----|
| 1.よく行く    | ・・・ | 6人  |
| 2.あまり行かない | ・・・ | 31人 |
| 3.全く行かない  | ・・・ | 2人  |

その理由を教えてください(有効回答22名)

- ・氏神様だから(よく行く)
- ・行事を知らなかったり、忘れていたりする
- ・神様が不浄を嫌われるので
- ・興味ない、信仰していない
- ・面倒くさい、つまらない
- ・忙しいから

志賀海神社の祭神は底津綿津見神、仲津綿津見神、表津綿津見神です。このことを知っていましたか?(有効回答36名)

1. はい …… 8人
2. 聞いたことがある …… 15人
3. 初めて知った …… 13人

以下は志賀海神社の主なお祭りです。知っていたものにいくつでも「 」をつけてください。(有効回答38名)

(複数回答可) がついていた率 は大祭 は県の無形文化財)

- 歩射祭 …… 97%
- 山誉種蒔漁獵祭 …… 97%
- 田起祭 …… 13%
- 御田植祭 …… 11%
- 祇園神楽祭 …… 29%
- 七夕祭 …… 95%
- 男山祭 …… 71%
- 国土祭 …… 66%
- 知子祭 …… 24%

志賀海神社の八乙女は、閉経した女性になります。このことを知っていましたか?(有効回答38名)

1. はい …… 25人
2. 聞いたことがある …… 5人
3. 初めて知った …… 8人

八乙女の舞を見たことがありますか?

(有効回答37名)

1. ある …… 26人
2. ない …… 11人

もしあなたが、八乙女になるのにふさわしい条件をそろえていたら、八乙女になりたいと思いますか?(有効回答37名)

1. ぜひやりたいと思う …… 2人
2. 勧められたらやると思う …… 1人
3. あまりしたいとは思わない …… 21人
4. したくない …… 13人

その理由を教えてください(有効回答23名)

- ・無関心、興味がない
- ・面倒くさい
- ・忙しい
- ・足が悪い
- ・体力がない
- ・踊りが苦手
- ・人前に出るのが苦手

夏でも着物を着なくてはいけな

神社に不満がある

嫁に来たとき余所者あつかいされた

八乙女の文化を次世代に残したいと思えますか?(有効回答34名)

1. ぜひ残したい …… 17人
2. どちらでもよい …… 17人
3. いらなと思う …… 0人

八乙女の後継者不足の理由を、あなたはどのように思われますか?

(有効回答19名)

- ・人口が減った
- ・時代の変化
- ・お宮に奉仕する人自体減っている
- ・関心のない人が増えている
- ・仕事を持つ女性が増えた
- ・歳がいきすぎている。華がない
- ・そろそろ舞うので若い人はしない

## 第二節 クロス集計

ここで、クロス集計を試みる(資料8)

### 年代別

まずは、年代別である。お年寄りに話を聞くと、たいてい「今の若い人は・・・」という台詞が登場する。果して本当に若い人に問題があるのだろうか

《志賀海神社の祭神を知っていたか(質問)》

この質問( )は、志賀海神社についての知識をはかるために設けたものである。予想どおりに、若い世代は祭神を知らない人が多く、年齢が上がるにしたがって知っている率が高くなっている。それだけ、神社に対する関心が若い人には薄いということなのだろう。

《八乙女は閉経した女性になることを知っていたか(質問)》

この質問( )は、八乙女についての知識をはかるために設けたものである。これも上と同じく、非常に分かりやすい結果が出ている。若い世代は知っている人のほうが少ないが、70歳以上になると、知らない人はいない。

《八乙女になりたいと思うか(質問)》

これはとても意外な結果がでた。「やってもいい」と思う人全員が若い世代の人だった。それに対し、「したくない」とはっきり言った人は、50、60代に多い。この世代は歳のにも、八乙女のはなしが来る確率が高く現実味を帯びている分、現実問題として考えてしまい、はっきりと拒否の姿勢をとるのかもしれない。また、50、60代の人、八乙女が家付きであったことを知っていて、「自分はやらなくてもいい」と思っていることも考えられる。

志賀島で生まれた女性と島の外からお嫁に来た女性の比較

志賀島は今では本土とつながっているとはいえ、昔は離れ島であった。だから、島の外からお嫁に来た人と島の人とは考えが違うはずである。果たして両者にどういった違いがあるのであるか考えてみたい。

《志賀海神社の祭りをいくつ知っているか(質問)》

生まれてからずっと身近に祭りを見てきた志賀生まれに比べて、島外からお嫁に来た人は、馴染みが浅いようだ。しかし、それでも4個以上知っている人が半数以上である。

《八乙女は閉経した女性になることを知っていたか(質問)》

志賀生まれだと、身近に八乙女がいることもあったのだろう。八乙女に関する知識も、志賀生まれのほうが持っているようである。

《八乙女になりたいと思うか(質問)》

これも分かりやすい結果である。はっきり「したくない」という人が島外生まれに多いのは、「嫁に来たとき余所者扱いされたので、志賀のために何かをしようという気持ちになれない」という意見もあったことから、「自分たちは部外者である」という意識が読み取れる。

《八乙女の文化を残していきたいか(質問)》

さすがに「いらぬ」といった人はいなかったが、「どちらでもいい」と関心のない人が両者とも多いのに驚いた。やはり島外から来た人のほうが、その割合は高い。

参道沿いに住んでいる人と参道沿いに住んでいない人との比較

国土祭の章で述べたように、神社への参道沿いに住んでいる人たちとそうでない人たちには、

神社に対する意識が違っている。そのことをアンケートから検証してみたい。

《志賀海神社の祭りをいくつ知っているか(質問)》

国土祭など街まで下りてくる祭りは、参道で行われる。見にいかななくても、祭りの様子を知ることができる。そんなことから、通りの人にとって祭りは身近に感じるのだろう。「小っちゃい頃から志賀の祭りを見て育ちました。もうそれが当たり前風景になってしまってます」と通りに住んでいる中西ミツコさんのむすめさんはおっしゃっていた。

《八乙女は閉経した女性になることを知っていたか(質問)》

今の八乙女は全員が通り周辺に住んでいる。それだけ八乙女に対しての愛着が強いということだろう。

《八乙女の文化を残していきたいか(質問)》

通りでない人は八乙女に対する関心の低さから、「どちらでもいい」という人が多い。通りの人のほうが愛着が強いと考えられる。

### 第三節 「その他の意見」からの考察

もし志賀海神社に関してご意見などありましたら、ご自由にお書きください

- ・このご時世、氏子も積極的ではなくなってきた。
- ・文化を残していきたいのなら、宮司、役員が頭をさげて頼んでまわるべき。
- ・各行事のいわれ、伝統、流れが分からない。参拝者だけでなく氏子にも、きちんとしたかたちで伝えていったら、もっと親しみやすい神社になると思う。

・由来を子どもに聞かせ、育てていったらいいと思う。

このアンケートを取るまで、主に神社側の話聞いていた。そのため八乙女だけでなく神社に奉仕する人が減ってきた原因は、氏子に敬神の念がなくなってきたことが大きいのだろうと想像していた。しかし、このアンケート結果を見ると、神社側にも原因がひそんでいることが明らかになった。

中西さんが新しく八乙女に加わることを折居さんから聞き、位上げの儀式の日取りについて宮司に問い合わせたことがあった。そのとき、宮司は「私は位上げの儀式どころか、新しく誰かが入られることも聞いていませんよ。でも、八乙女さんが決まったとおっしゃってたなら、そうなんでしょうね」と言われた。新しい八乙女候補を探したり依頼したりするときに、宮司さんはとくに動かず、結果報告を聞くだけなのだろう。これがアンケートにあった、「神社側が積極的に動いていない」という意見が指していることなのだろう。

氏子に敬神の念がなくなってきたにしろ、神社側が積極的ではないにしろ、神の存在が人々のところから薄れてきたという時代の変化の影響を受けていることには変わりはない。

## 第九章 考察

志賀海神社では、古くからの祭りが今でもほぼ毎月行われている。しかもそのすべてが観光客集めのためではなく、あくまでも氏子主体で、地域の人以外にはあまり知られることなく行われている。このような時代のなかで、しかも都会の一角で、昔ながらの氏子主体の祭りをここ

まで保てたのは、奇跡と言ってもいいくらいだ。

八乙女もそうだが、いろいろな場面で志賀海神社は氏子の奉仕活動に支えられている。現在そのように氏子が積極的に関わっている神社は少なく、余所と比べて神社と氏子のつながりは深いものであると考えられる。

しかし、志賀島といえども時代の流れの影響を受けてきたことには変わりはないようだ。家付きで代々受け継がれ、候補者が多いときにはくじ引きできめていた時代もあったという八乙女は今、後継者問題に悩まされている。家付きが通用したのは先々代くらいまでだという。そのころからなり手不足が深刻化してきたのだろう。無報酬なだけに、神社と氏子の関係の変化が露出しやすいところだと考えられる。

こういう問題について、神社関係者は「時代の流れ」「氏子の信仰心の薄れ」を原因に挙げる。しかし、氏子から取ったアンケートを見てみると、それだけではないようだ。

神社そのものや祭りの意味について知らない人が増え、意味が分からないから興味を持ってない、といった人が神社や祭りから離れていくのだと考えられる。それに、神社の内部のこと(人事など)は、関係者のなかだけで話がすすみ、他の氏子には全く情報が入ってこない、という話をアンケートを取る中で聞いた。もっと広く、平等に神社についての情報を伝えていく必要がある。中西さんはそれを子どもたちにも行うべきだとおっしゃっていた。

そういった意見に対して神社側は、「神社にこない人に由来などを話す機会がない」と言う。知らないから祭りに行かない氏子と、来ないから話せない神社側のすれ違いが見られた。

神社側は、八乙女のなり手不足をはじめとする諸問題に対して、氏子の「神離れ」を嘆くば

かりで、今のところ具体的な方策は行っていない。しかし、氏子と同じくこのような活動の必要を感じてはいる。

八乙女や祭り、古くからのしきたりなど、志賀島にはまだまだたくさんの伝統が残されている。それら志賀島の貴重な文化を残していくために、ぜひ神社側が氏子と肩を並べて一体となって、積極的に広報、教育活動に力を入れ取り組んでいってほしいと強く感じた。

#### 【参考・引用文献】

『志賀海神社略記』

『志賀島の四季』

森山邦人 1981 (財)九州大学出版会

『海国日本の誕生』

岡田米夫 1976 (株)文永社

『志賀海神社御神幸祭』

梶嶋好之

『日本の神々・・神社と聖地 第1巻九州』編)

谷川健一 1984 (株)白水社

『西日本民俗博物誌 上』

谷口治達 1978 西日本新聞社

『日本国語大辞典 第19巻』

編)日本大辞典刊行会 1976 小学館

『海と列島文化 第3巻 玄界灘の島々』

宮田登 1990 小学館

『福岡市の人口(住民基本台帳)』

謝辞

本稿を作成するにあたっては、たくさんの方々にお世話になるとともに多大な迷惑をおかけいたしました。

まず、志賀海神社の宮司阿曇磯和氏には、お忙しい中、長期間にわたり調査にご協力頂いた上、貴重な文献や資料をお貸し頂きましてありがとうございました。

また、八乙女の方々には突然の訪問にもかかわらず、大変親切にして頂き、貴重なお話をうかがわせてもらいました。折居さんにはいろいろなものを振る舞って頂きました。折居さんのご家族にも大変お世話になりました。中西さんと中西さんの娘さんには、島の学者梶嶋氏を紹介していただいたり、志賀の文化のお話を分かりやすく説明していただきました。

八乙女の方々の敬神深い心と清らかな生活、そして志賀島の貴重な文化を担っているという使命観には、大きく影響され、信じる心の崇高さと伝統を守っていくことの大切さを学ばせて頂きました。

島の歴史をご指導くださった梶嶋好之氏からは、志賀の歴史や言い伝えについてのお話をうかがうことができ、貴重な資料を下さいました。忙しい中、貴重な時間を割いてくださり、感謝しております。

志賀島の住民の方には、アンケートにご協力頂き、貴重なご意見を手にすることができました。

志賀海神社、八乙女について調べていくにあたって、北九州大学文学部比較文化学科の佐藤真人助教授には参考文献をお貸し頂きました。

福岡市高宮八幡宮禰宜の古賀靖啓氏には、神社界の現状について教えてもらいました。

最後に、私の指導教官である文学部の竹川大介助教授には、忙しい中、パソコンの使い方からご指導頂きました。私の勉強不足のせいで、先生には多大なご迷惑をおかけしたことをお詫びしたいと思います。フィールドは決まったも

のの遅々として調査の進まない私に、地道にコツコツと調べていくことの重要性を教えてくださいました。

調査が思うように進まず、何度もくじけそうになりましたが、先生のきめ細かいご指導と、皆様の暖かいご協力のおかげでなんとかやり遂げることができました。今思えば、これをやり遂げたことで自分自身がひとまわり大きくなったような気がします。

このような機会を与えてくださった先生には深い感謝の念を表したいと思います。